



市長 恐竜博物館に年間25万人、スキージャンプには年間30万人訪れます。このうち、2割でも市街地に訪れてもらうだけで相当潤います。例えば恐竜博物館から繊維博物館へという観光コースをつくることでまちなかへの吸引力を付ける。そして本町の見どころをPRすることで、散策してみようかということになると思います。まちにそのような回遊性をつくっておけば、おのずと人が訪れるようになると思います。

長谷川 今は、ひと休みする場所もないですよ。年の市に来てくださるかたにも少し気の毒な感じがしていました。でも、年の市などに訪れる市外のかたなどからは「活気があっていい町ですね」と、褒められるんですよ。

市長 お祭りなどは本当ににぎやかで活気がありますよね。ただ、普段とのギャップが激しいですよ。このギャップを少しでも埋めなくてはいいけ

い。そのためには、まちなかを散策できるような雰囲気やお店、施設などが欲しいですね。雰囲気のいいまちを先につくるか、人が来て潤うから雰囲気のいいまちになるのか、それは相乗効果だと思えますね。そういう意味では、清水が整備されてからは、今まで商売をされていたかたから、またここで何かやってみようかという気持ちが出てきてきているという話も聞いています。

長谷川 そういう雰囲気が徐々にできあがっていければと思っています。

市長 それには、今までのように行政主導で推し進めて行くのではなく、住民といっしょにやっていきたいですね。

長谷川 でも、みなさんそれぞれのご意見があるみたいで、それをまとめるのは大変なことですよ。

市長 繊維博物館についての考えとしては、織物体験や実際の機織現場に案内できるようなシステムをつくりたい



若い人が勤める場所を作らなくては

けない。勝山の高齢化を考えるとまちづくりは福祉という面を視野に入れて福祉施設に勤める若い人たちをまちの中に呼び込む。そうすれば新しいお店などができるよくなると思います。まちなかに若者の働く場所をつくることで、チャレンジして新しい商売を始めようという考えも生まれてくると思います。

市長 今の国の方向は「在宅介護」ですが、そうすると本人も減入ってしまうだろうし、ご家族も大変だと思っています。しかし生まれ住むところにはいつまでもいたいというのも理想だと思います。私は今後、在宅と施設介護の中間施設を作りたいと考えています。地域にグループホームのようなものがあるって、5〜6人の単位でいつも集まれるような施設です。そして、そこに働くのが今言われたような若い人。

原谷 福祉を含めたまちづくりの考え



まちなか活性的の核を目指す木下機業場

と思います。そうすることで博物館から派生して勝山の見どころをいっしょに紹介でき、「滞在型」の形ができあがる。

東野 私が今日着てきたのは、和紙の繊維を織り込んだジャケットですが、これはうちの工場で織ったものです。蕎麦で染め上げて生地は羽二重（絹織物）です。これからはスカーフなども作っていこうと考えています。

博物館の中を見学するだけではあまりにも印象が薄いので、体験工房のようなことをやるのも一つの方法だと思います。

長谷川 特に女性というのは、工房などでの手作り体験が楽しみの一つなんですよ。スカーフ一枚でも染められたら大満足ですからね。



東野 そうですよ。簡単に染められるシステムができると思いますよ。今は、地場産センターで市民グループ「手染めの会」の活動も行われていますが、これからは観光面と連動した手染め体験という考えも出ています。

市長 染め物体験は地場産センターです。そのような連携も必要になってくるかも知れませんね。

長谷川 各施設を連動させたルートを観光会社に作ってもらうのもいいですね。

市長 観光の目玉ができると、それらを組み合わせたらコースが設定できます。コースの中に、恐竜博物館や平泉寺などを組み入れ、観光日程に応じたさまざまなコース設定をして、宿泊はニューホテルやまちなかの旅館が利用できるような設定にする。いまは、恐竜博物館や平泉寺、越前大仏など観光

いと思います。

まちには何かが必要かということになると、食料品店も必要だし、飲むところも食べるところも必要です。昔は、機能が全部揃っていましたが、本町も後町も。それが、まちがどんどん広がってその機能も外に広がってしまっただ。それによってまちなかの機能が果たせなくなりました。だから、もう一度何が必要なのか。どういった業種が必要なのかという原点を戻して、その土台づくりが必要だと思っています。

長谷川 そうですね。そうでないと来てくださる人もさみしい。

市長 ちょっとした買い物などは町の中で用を足せば一番よい。ちょっとした物も、クルマに乗らなければ買に行けない世の中は少し異常ですよ。しかし、それを異常として考えられないような社会になっています。最近「コンパクト・シティ」という表現がされていますが、そういう時代に戻ると思っています。行政はその働きかけを先駆けてやらなくてはいけないと感じています。

市長 えちぜん鉄道も復活して、大変いい形でみなさんに利用されていますが、いまの駅は、まちなかまでは遠いので、バスの機能と連動できるような駅前づくりに取り組んでいます。

東野 私も福井市内に用事がありますので、電車はよく利用します。帰りが

いつになっても駅に必ずバスが待っているの、とてもありがたいです。

原谷 「広報かつやま」に、勝山駅前のロータリーのイメージ図が載っていましたが、ちょうど東京駅の赤レンガのように、国の登録文化財に指定されているいまの駅舎を残しつつ、例えば勝山駅後の駐車場の部分に近代的な駅舎を整備して、いまの現駅舎を記念館のようなものに位置づける方向も面白いと思います。

市長 駐車場の機能も残す必要がありますが、その案もまだ時間がありますので考えていきたいと思っています。

将来的には、「LRV」車両として低床型でまちなかも走れるような電車の導入を考えています。そういうことも視野にいれながら橋を渡って電車をまちなかにゆくり走りせたいと考えています。そのためのまちなかの整備も必要になってくると思います。

長谷川 そんなふうになれば、まちなかやさしいイメージに変わるでしょうね。

市長 今日みなさんと大変いいお話ができて、どんどん発展していく材料と元気をいただきました。ありがとうございます。これからもぜひ力をあわせてがんばっていきましょう。本日は、ほんとうにありがとうございました。

—ありがとうございました。

### まちの機能を

### もう一度見つめ直す

原谷 私は、外から人を連れてくるという発想から変えて、まず内側から元気を出すことが必要だと思っています。高齢化で後継者もいない。このまちは、